

## ふたつの「琉球」

—13・14世紀の東アジアにおける「琉球」認識—

大田由紀夫  
鹿児島大学OTA Yukio  
Kagoshima University

## はじめに

宋元期の「琉球」（文献上では「流求」「瑠求」など様々に記されるが、以下基本的には「琉球」に統一する）に関する史料は限られるため、これを専ら対象にした研究はあまりない。また、『隋書』巻81「流求国伝」以来、その所在地については、台湾説、沖縄説、台湾＋沖縄説などをはじめとして様々な議論が存在しており、各論者によってその見解は大きく異なる。よって、宋元期の史料に散見する「琉球」の位置比定も困難をきわめる<sup>(1)</sup>。そのような中、この問題に関する数少ない専論ともいえるべき研究として、曹永和（曹1963・1988）、梁嘉彬（梁1972）という台湾の研究者の論考があげられる。

曹永和は、宋元期の「琉球」認識にはふたつの異なるイメージが混在していたと指摘する。ひとつは「琉球」＝「野蛮な島」という観念で、いまひとつは福建・広東などの華商の往来する交易相手という認識であり、前者が台湾、後者がのちの「琉球（＝沖縄）」にそれぞれ対応していたと論じる（曹1988・2001）。また梁嘉彬は、宋元期の「琉球」はおおむね現在の台湾を指すが、宋元交替期などには台湾と沖縄とが混同されることもしばしば起こり、その場合の「琉球」とは「東方に浮かぶ島の汎称」に過ぎないとする（梁1972）。

曹・梁らの研究は、宋元期の「琉球」＝台湾と捉える見解が優勢を占める現状のなか、乏しい関連史料の詳細な検討を通して、通説的理解では説明困難な要素が当時の「琉球」認識に含まれていたことを示唆する貴重なものである。本稿は、これらの先行研究の成果を踏まえ、13・14世紀に記された諸史料より窺える「琉球」認識について考察する。

## 1. 同時代史料からみた「琉球」—宋元中国の「琉球」認識—

まず宋元期には「琉球」＝中国の東南海にある僻遠の島というイメージのあったことが、当時の史料から確認できる。たとえば、南宋の楼鑰（1137～1213年。浙東明州の人）『攻媿集』巻3「万耕道の瓊管（海南島）に帥（＝安撫使）すを送る」という詩の一節からは、そのようなイメージの一端を窺うことができる。

琉球・大食、更に天表、舶、海上を交して俱に朝宗す。

琉球・大食更天表、舶交海上俱朝宗。<sup>(2)</sup>

中国に來航する海外諸国に言及するなかで、「琉球」は西方の遠国・大食（アラビア・ペルシャ方面）とともに、東海の果てにある地域の代表としてその名が挙げられている。宋代に「琉球」朝貢の事実<sup>3</sup>は伝えられていないので、恐らくこの文言は最果ての地からもはるばる來航する人々のいたことを詩的に表現したものであろう。なお、この楼鑰の詩は、

其の海外雜国、耽浮羅・流求・毛人・夷亶の州・林邑・扶南・真臘・干陀利の属の若きは、東南の際天、地は万を以て数う。或いは時に風潮を候ちて朝貢し、蛮胡賈人、海中に舶交す。

其海外雜国、若耽浮羅・流求・毛人・夷亶之州・林邑・扶南・真臘・干陀利之属、東南際天、地以万数。或時候風潮朝貢、蛮胡賈人、舶交海中。

といった唐・韓愈の文章などを焼き直したものと思われるため、ここでの「流求」も取って付けただけの「おかざり」のような単語なのであろう。なにか具体的な地域を念頭において語っているというよりも、楼鑰はこれを遙か彼方にある東方の果ての島として漠然と認識していたに過ぎないと考えられる<sup>(3)</sup>。また韓愈の「琉球」認識も、その内実は楼鑰と同じレベルに止まっていただろう。

このほかにも、南宋の陸游（浙東紹興の人）のある詩（「歩出萬里橋門至江上」、1176年の作<sup>(4)</sup>）の一節には、

一日、新雨、霽<sup>は</sup>れ、微茫として流求を見る。（割注）福州に在り海に<sup>うか</sup>びて東望せば、流求国を見る。

一日新雨霽、微茫見流求在福州泛海東望、見流求国。<sup>(5)</sup>

という句がみられ、雨上がりの晴れ間に福州沖からボンヤリと眺められる東方の島を「流求」と呼んでいる。これが何処を指すのかについても各論者により意見が分かれ、現在の台湾であるとか、福建の東海に浮かぶ島々の総称などとされて定論をみない（黄寛重1987）。ただ、ここで確実にいえそうなのは、「琉球」は福建東海に浮かぶ島とする漠然とした共通イメージが当時の人々に持たれていた点であろう。そしてこの陸游の認識は、おそらく沿海部の事情に疎い一知識人の単なる「思い違い」の類ではなく、たとえば彼の別の詩（『劔南詩稿』巻59「感昔」、1204年の作）の一節で、

常に<sup>おほ</sup>記ゆ、早秋の雷雨、霽<sup>い</sup>れ、舵師の指点して流求と説いしを。

常記早秋雷雨霽、舵師指点説流求。<sup>(6)</sup>

と詠われているように、福州近辺の海民たちより得られた情報であり（これは「観光客」に対する地元「ガイド」のリップ・サービスの類なのかもしれないが）、一定のひろがりを持ったイメージであったといえる。

もっとも、宋元期の主要史料（『諸蕃志』巻上「流求国」、『文献通考』「琉球」、『島夷誌略』「琉球」、『元史』巻210「瑠求伝」など）に記される「琉球」は、現在の台湾を指していたと一般には認識されている。確かに宋元期のおもな史料にみえる「琉球」は、位置説明などの記述（「流求国は泉州の東に当たり、舟行すること約五六日」〈『諸蕃志』巻上、流求国〉、「（琉球は）澎湖より之を望めば甚だ近し」〈汪大淵『島夷誌略』〉、「泉州と瑠求は相近し」〈『元史』巻19、成宗本紀〉）を参照する限り<sup>(7)</sup>、台湾のことを指していると考えられる。

しかし他方で、前出の陸游の詩（「歩出萬里橋門至江上」）に関していえば、その割注で説明のある福州沖から東望できる「流求」を台湾だと捉えてしまうのも、やはり少々無理がある（実際問題として福州沖から台湾を望むことは不可能）。宋元期の認識も決して画一的なイメージが共有されている状態ではなく、当時の人々の多くは、台湾に関する明確な地理的認識を持った上で、かの地が「琉球」だと認知してはいなかったようである。

さらに、『元史』巻210「瑠求伝」の記述は、当時の人々の曖昧模糊とした「琉球」認識の一端を明瞭に示している。

（至元）二十九（1292）年三月二十九日、汀路尾澳より舟行し、是の日巳時に至り、海洋中の正東に山の長くして低き者あるを望見し、約去ること五十里。（楊）祥は「是れ瑠求国なり」と称し、（阮）鑒は「的否を知らず」と称す。祥、小舟に乗りて低山の下に至り、其の人の衆きを以て親ら上らず、軍官劉閏ら二百余人をして、小舟十一艘を以て、軍器を載せ、三嶼人・陳輝なる者を領して岸に登らしむ。岸上の人衆、三嶼人の語を曉<sup>さと</sup>らず、為に其の殺死せらる者三人にして、遂に還る。四月二日、澎湖に至る。祥、鑒・（呉）志斗の「已に瑠求に至る」の文字を責めるも、二人従わず。明日、志斗の蹤跡を見ず、之を覓<sup>もと</sup>むるも有る無きなり。……祥、顧つて「志斗、初

め瑠求は往くべからずと言うも、今祥、已に瑠求に至りて還り、志斗、罪を懼れて逃去せり。」と称す。

二十九年三月二十九日、自汀路尾澳舟行、至是日巳時、海洋中正東望見有山長而低者、約去五十里。祥称是瑠求国、鑒称不知的否。祥乘小舟至低山下、以其人衆不親上、令軍官劉閏等二百余人、以小舟十一艘、載軍器、領三嶼人陳輝者登岸。岸上人衆不曉三嶼人語、為其殺死者三人、遂還。四月二日、至澎湖。祥責鑒・志斗已至瑠求文字、二人不從。明日、不見志斗蹤跡、覓之無有也。……祥願称志斗初言瑠求不可往、今祥已至瑠求而還、志斗懼罪逃去。

引用部分にある通り、元朝の使節が「瑠求」に派遣された際、そもそもどこが「瑠求」であるのかについてすら、使者たちの間で認識の対立がみられた。招諭を進言した福建出身の「書生」呉志斗や元より派遣された武将楊祥・文官阮鑒は、福建（ないし泉州）の東、さらに「澎湖」の向こうに「瑠求」が存在するといった程度の認識しか、どうも持っていなかったようである。ましてや元初期の一般人の「瑠求（おそらく台湾）」に関する認識は、さらに漠然たるレベルにあったものと考えられる。その後、大徳元（1297）年に人を派遣して「瑠求」で「生口一百三十余人」（『元史』卷19、成宗本紀）を捕獲した記事が伝えられるのみで、結局は国初の一時期を除き、公的には元朝一代において「琉球」とは没交渉の状態にあった。従って、元人の認識も基本的に曖昧模糊とした水準のままであったとみてよいだろう。

このように宋元期の「琉球」に対する認識は、史料・執筆者によってユレ・ブレがみられた。南宋期の楼鑰や陸游の詩をみれば、彼等がどれほどの明瞭な地理的知識を持った上で、「琉球」に言及できていたのかは疑問である。執筆者自身は当の言及対象に対して漠然としたイメージを持っている程度で（一般の人々の認識レベルもおそらく同様）、「琉球」について語っている場合が多かったように思われる。

ところで、さきほど取り上げた文字資料のほかにも、宋代の「琉球」認識の一端を窺える資料群が存在する。それは当時の中国で作成された地図であり、この種の図像資料には海外諸地域に関する情報がしばしば盛り込まれている。そうした地図のなかで「琉球」を記した最古の部類に属するものとして、北宋末～南宋初期（12世紀前半）の作成とされる「古今華夷区域惣要図」（税安礼『歴代地理指掌図』所収。以下「華夷区域図」と略称）と南宋期（13世紀）にできた「東震旦地理図」（志盤『仏祖統紀』所収。以下「東震旦図」と略称）のふたつがあげられる<sup>(8)</sup>。

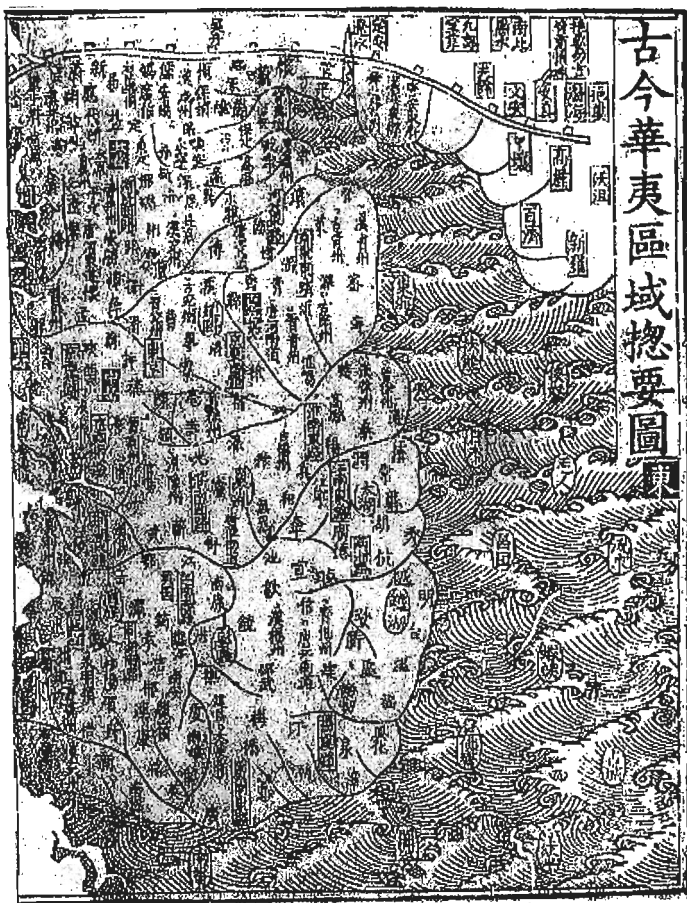


図1 古今華夷区域惣要図

まず前者の「華夷区域図」は、日本や高麗との交易港である明州（寧波）近海に浮かぶ昌国の東海上に「流求」を描く（図1）。大まかにいって本図では、「流求」が中国東海の彼方に浮かぶ島と認識されているようである。他方、後者の「東震旦図」では、「流求」が「華夷区域図」とその位置を若干異にし、福州（ないし福建）の東海上に存在するものとして描かれている（図2）。つまり、両図はともに東の海上に記しているものの、それぞれ異なる地点（浙江東海上、福建東海上）に「流求」を位置づけているのである。

このような相違が存在する点から判断すれば、宋代中国の地図作成者たちに「琉球」の所在地（ひいては東方海域の地理）はあまり明瞭に把握されていなかったことがわかる。さらにいえば、この頃には、中国（ないし福建）の東海に浮かぶ島という情報を持つだけで、それ以上は明瞭な共通認識も形成されていなかったようにみえる。もっとも、宋元期の地図では、海外の記述、たとえば日本についてはもっと混乱した記載がされているので（海野1999）、「琉球」に関するこれくらいの表現のブレはまだよく描かれている方だと評価してよいのかもしれない。

とにかく当時の「琉球」認識の様相は、知っている者はある程度の認識（台湾方面に関する地理的知識）を持っているけれども、知らない者は中国東海の遠島である位のイメージしかない、といった落差の著しい状態だったようにみえる。こうした辺りに当時の中国における「琉球」認識の曖昧さ・不明瞭さの一端を窺うことができるだろう。なお、「東震旦図」についていうなら、その画面構成上の制約などの点を考慮する必要もあると思われるが、とりあえず同地図は福州東海あたりに浮かぶ島という認識に基づいて「流求」を描いているように見え、前述の陸游詩のごとき「琉球」イメージ（＝福州東海の島）との一定の親和性が看取される。

このほか、さきの2地図に遅れて製作された、京都東福寺の塔頭・栗棘庵にその拓本が伝来する「輿地図」（南宋末頃の作成）などは、「華夷区域図」と同じように、「流求」を慶元（寧波）の東海に記している（図3）<sup>(9)</sup>。この地図でも、現在の台湾方面に「琉球」が存在するというイメージは必ずしも読み取れない。本章で参照した3地図が当時の一般的な「琉球」認識をどの程度正確に反映しているのかはなお検討の余地があるけれども、文字史料より看取される宋元人の認識のユレと類似した傾向が同時代の地図からも確認できる。

ここまでの考察を踏まえると、宋元中国には「琉球」に対してそれほど明瞭な地理的認識は形成されていなかったと把握することが可能である。このような認識のあり様は、当地が中国の東の境界領域に位置することと関係していたと考えられる（『海外諸国、蓋し此れより始まる』〈『島夷誌略』「琉

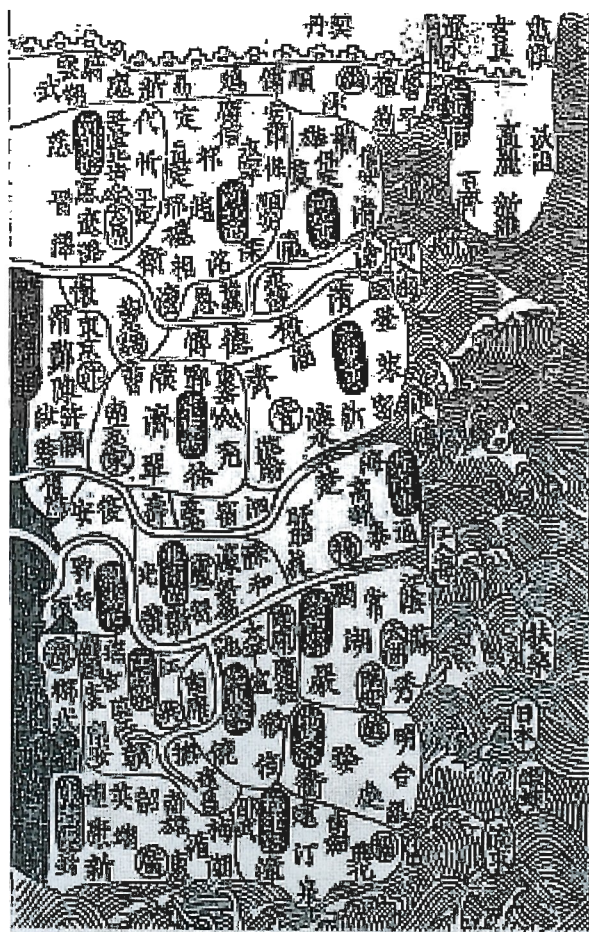


図2 東震旦地理図

球」))。およそ境界領域においては、そこが内と外とを隔てる狭間であるため、人的交流の度合いや政治的影響力の高低が時期によってしばしば異なり、その情報入手機会の多少も自ずと変化するため、境界領域に対する人々の認識は多かれ少なかれ漠然としたものになりやすい(村井章介1997)。隋代や元代における「遠征」とそれ以後における公的レベルでの没交渉といった一連の経過は、中国側の認識にあいまいな要素を持ち込むのに好適な環境を提供したであろう。境界に存在した「琉球」に対する認識にユレが見られるのは、ある意味で至極当然のことなのかもしれない。なお、『諸蕃志』巻上「流求国」には、「流求国は、泉州の東に当たり、舟行すること約五六日」、「他に奇貨無く、尤も剽掠を好み、故に商賈通ぜず」と記され、また『島夷誌略』が『隋書』以来の記述を踏襲して食人の風習を記すなど<sup>(10)</sup>、従来から指摘されている通り、「琉球」を未開の野蛮な島とする認識が宋元期にも存続している。

以上のように、台湾や沖縄という島の存在をそれぞれ明瞭に認識した上で区別するといった地理

的認識を、宋元中国の人々が有していたとは到底考えられない。各史料の記述を踏まえると、まず福建東海にある未開の島という当時の人々の抱いている共通イメージがあり、さらにそうした東海の島々の中で最も目立った存在である台湾を「琉球」と呼ぶことが通常多かった、といったあたりが宋元期中国における「琉球」認識の一般的な様相だったと考えられる。

従来から多くの研究者により指摘され、また本稿でも確認した通り、少なくとも宋元期に限ってみれば、中国側の主要史料にみられる「琉球」は、台湾方面を指しているとみて間違いはない。ただし、当の「琉球(=台湾)」自体に対する宋元人の認識は、かなりユレ・ブレが存在していた。このため、陸游の詩にみられるような、「琉球」=福建東海に浮かぶ島との抽象的認識に基づき、およそ台湾と考えられないような島に対してもその呼称が平気で用いられる事例もみられたのである。とするなら、「琉球」=台湾の等式が常に成り立つというような確固たる認識の存在を、宋元期に想定してしまうのは危険だろう。

## 2. ふたつの「琉球」—宋元中国と中世日本—

前章で述べたように、宋元期の「琉球」は、台湾方面を漠然と指す名称であった。ところが、同時代の東アジアにおいては、ある一定地域を「琉球」と把握する認識を持っていた地域が中国以外にいまひとつ存在していた。それが中世日本である。その「琉球」認識を記述する代表的史料としては、鎌倉時代の13世紀の著作とされる『漂到流球国記』があげられる。これは「寛元元年(1243)に中国の宋に渡った一行が漂着した流球において見聞したことを中心に、慶政という僧侶が当時の船頭や僧侶から聞き取りしてまとめた」(山里1999b、230頁)書物とされている。たとえば、同書のなかで

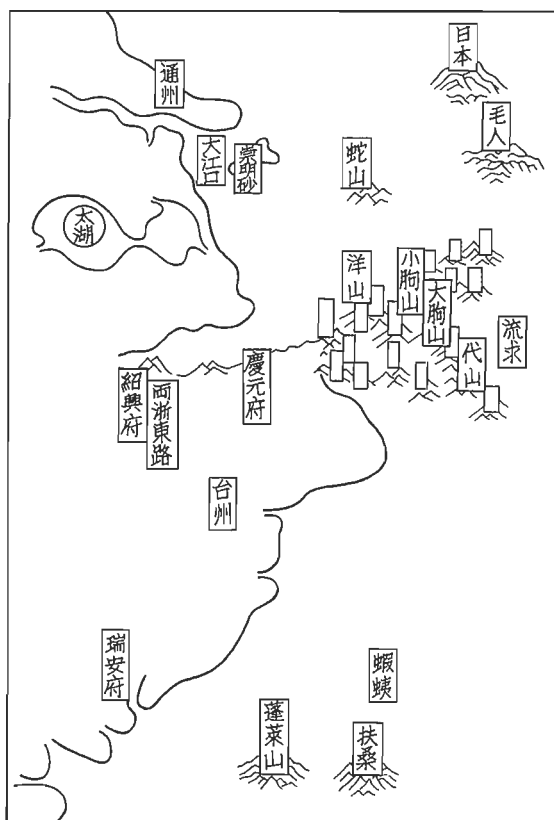


図3 栗棘庵所蔵宋拓「輿地輿記」略図  
(室賀1956より)



「琉球」は以下のように記されている。

(寛元元年9月)同十七日、琉球国の東南方に漂到す。船裏の諸人衆口討論するに、或ものは貴賀<sup>きがい</sup>国と云い、或ものは南蕃国と云い、或ものは琉球国と云う。終に即ち皆謂う、是れ琉球国なり、と。命は朝暮に在り、奈何せん奈何せん。

同十七日、漂到琉球国東南方。船裏諸人衆口討論、或云貴賀国、或云南蕃国、或云琉球国、終即皆謂、是琉球国也。命在朝暮、奈何々々。

ここに描かれているように、「琉球」は生きては戻れぬ恐ろしい島として当時の人々にイメージされていた。ところで、同書の「琉球」が一体どこを指すのかについては、必ずしも確たる証拠が提示されている訳ではないが、日本史側の研究では、これを「沖縄本島」であるとか(山里1999b)、中世日本の「西の境界」である「鬼界ヶ島を越えたところ」(高橋公明2002、42頁)などと比定しており、おおむね沖縄方面のことと理解しているようである。ただ本書の記述に関しては、近年、当時の実体験を記録したものというより、「食人種」などといった既存情報の影響を受けた「作為性」のみられる、「対琉球知識」の「低かった」「鎌倉時代日本の対琉球観を示したもの」との指摘がされている(下郡剛1999)。

『漂到琉球国記』の記述内容に対する評価には各論者で相違が存在するものの、本稿ではこの問題には深入りせず、とりあえず同書の記された当時の日本で「琉球」がどの地域に存在するとイメージされていたのかのみを問題にしていきたい。そして当該問題を確認するには、やはりこの頃の「琉球」認識を視覚的に示す古地図を参照するのが捷徑であろう。幸いにも日本側にはこの点を確認するための格好の地図が存在している。最古の日本地図のひとつとして著名な、鎌倉・金沢文庫所蔵の「日本図」(嘉元3〔1305〕年作成と推定。以下、金沢文庫本「日本図」と記す)がそれである(図4)<sup>(11)</sup>。この図はその半分が失われているものの、西日本およびその周辺地域を描いた部分が残存し、そこに「琉球」に関する貴重な情報が記されている。本図には九州南方にあたる西南隅に大きな陸塊の一部が描かれ、この部分には次のような文字が存在する。

あまみ 雨見嶋、私領郡なり。龍及国宇嶋、身は人にして頭は鳥なり。

雨見嶋、私領郡。龍及国宇嶋、身人頭鳥。

黒田日出男によれば、本地図は南宋滅亡直前の状況を記したものとわれ、これが依拠したであろう原図の成立時期はさらに13世紀後半頃まで遡ると推測されている(黒田2003)。金沢文庫本「日本図」の記載を参照すると、その地理的認識はかなり莫然としたもののようだが、13・14世紀頃の日本には、奄美以南の「南島」(≡沖縄方

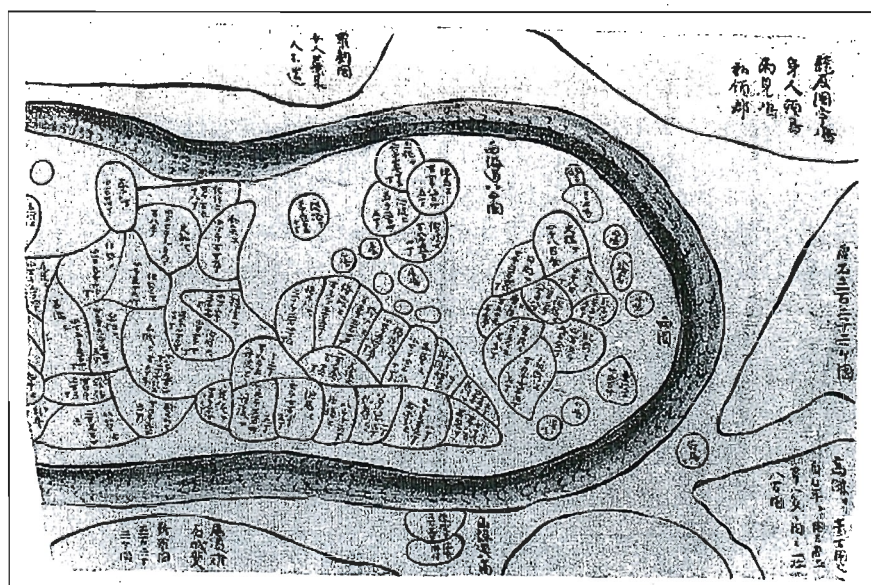


図4 金沢文庫所蔵「日本図」

面)を「琉球」と捉える認識が存在していたことがわかる。

また、金沢文庫本「日本図」と同系統の情報を伝え、ほぼ同時代に書かれた地図を写したとされる、千葉・妙本寺所蔵の「日本図」が近年発見・紹介され、注目を集めている<sup>(12)</sup>。この地図では、九州を描いたと考えられる島（これが「日本」を表していると考えられる）が大きく描かれ、その島の南方に「琉球国身ハ人頭ハ鳥」との文字が記されており、金沢文庫本「日本

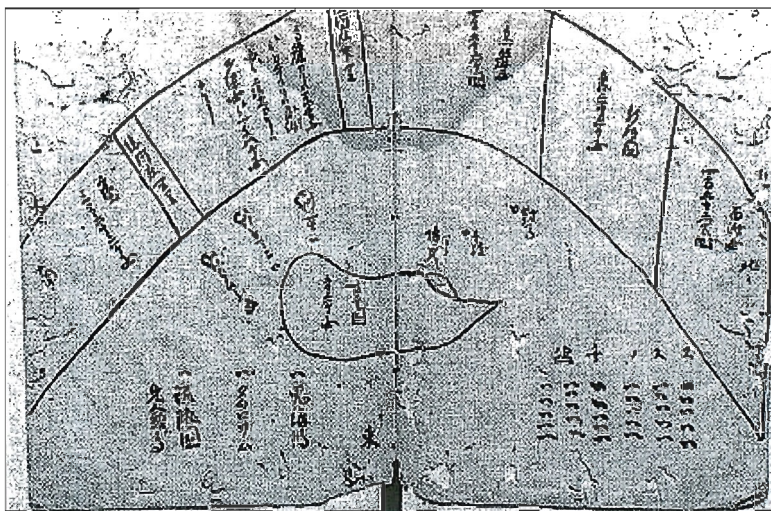


図5 妙本寺所蔵「日本図」

図」と類似した記述がみられる（図5）。金沢文庫本や妙本寺本の「身は人、頭は鳥」という記述に示されている通り、「琉球（≡沖縄）」に関する認識はかなり荒唐無稽な要素を含んでいるものの、中世日本では奄美以南の「南島」を「琉球」と観念していたことはほぼ確かであろう。従って、その内容が事実かフィクションかは別として、『漂到琉球国記』の「琉球」も、「南島（沖縄方面）」を指す呼称として使われていると理解するのが妥当である<sup>(13)</sup>。

宋元中国では、おおむね台湾方面を指す名称として「琉球」が使用されていた。これに対して同時代の中世日本では、中国とは異なり、奄美以南の「南島」を漠然と指す名称であった。このような日中間における異なる認識の並立状態は、互いの差異が顕在化しにくい構造になっていた。なぜなら、どちらの「琉球」も中国の東海上にあって、かつ日本の南方に位置しており、しかも日中双方が当時この方面に対する明瞭な地理的共通認識を持っていなかったからである。台湾と沖縄の両方がその視野に入っていない限り、相互の認識の齟齬を発見することはきわめて困難であったと思われる。

かくて認識の相違が日中間でとくに顕在化することもなく、宋元中国は隣接する福建東海に浮かぶ島を、中世日本は九州南方に浮かぶ島を、それぞれ自らに引き付けて「琉球」と認識し続けていったのであろう。確かに13・14世紀の東アジアでは、沖縄は「琉球」として認識されていたが、ただそう認識していたのは中世日本だけでのことだったようなのである。こうした状態は、「琉球」なる名称のもとに沖縄と台湾という異なる地域が混同された状態というよりも、日本と中国で異なる認識が別個に形成されていたと捉えるのが適切であろう。つまり、当時の東アジアには、ふたつの「琉球」認識（宋元中国の「琉球」≡台湾と中世日本の「琉球」≡沖縄）が存在していたのである<sup>(14)</sup>。

他方、13・14世紀頃の東アジアに並存していた諸認識には共通した特徴もみられる。それは、『隋書』「流求国伝」系統の情報の影響であろうが、ともに未開で野蛮な「食人国」というイメージに示されているように、かなり荒唐無稽なレベルでしか「琉球」を認識できていない点である。つまり、その認識は宋元中国・中世日本ともに曖昧模糊とした漠然たるものに止まり、換言すれば情況次第でどう変容するのか予断を許さぬ、いわば流動的な認識であったといえる。そして、このような性質がつづく元末明初期において東アジアの「琉球」認識に変容をもたらす素地を提供していくことになる。

### 3. 「琉球」認識の変容—元末明初の中国を中心として—

東アジア（とくに中国側）における「琉球」認識に大きな変化がみられるのは、先行研究でもしばしば指摘されてきた通り、明代初期の洪武年間（1368～98年）であった。この時期にその認識の変容をもたらす契機として、中国と「琉球」の関係以上に、中国と日本との通交関係が大きな役割を果たしていたと考えられる。

さて、洪武5（1372）年に明朝が「琉球（＝沖縄）」へ遣使を行った経緯に関しては、佐久間重男・曹永和により提示された見解が現在のところ最も魅力的なものであるように思われる（佐久間1975、曹1988）。即ち、日本に2回派遣された明の使者・楊載が、訪日の際に情報を得て沖縄を経由して中国に帰還したため、明朝にその存在が認知されるようになり、ついで明の使節が沖縄に派遣された、とするのが両者の見解である。ただ、楊載による「琉球（＝沖縄）」経由の本国帰還という出来事は、嘉靖年間（1522～66年）の著作である鄭若曾『鄭開陽雜著』巻7「琉球図説」の記述によるものであり<sup>(15)</sup>、同時代史料に裏付けられた情報ではないという難点を持っている。

とはいえ、周辺地域の多くはその建国後2、3年の間に明からの遣使があったのに比べ<sup>(16)</sup>、「琉球（＝沖縄）」は洪武5年といういささか遅れた時点で招諭が行われたこと（遣使を決定するための何らかの契機がそこに介在していたと考えるべき）、またその遣使が2度目の日本遣使の直後だったことなどを考慮すると、沖縄経由の帰還という史実の有無を立証することはできないものの、楊載が2度にわたる日本滞在中に「琉球（＝沖縄）」情報を入手していた可能性はかなり高いといえる。

さらに付け加えると、中国側の認識に変容をもたらしたもうひとつの歴史的契機として、14世紀中頃の元朝末期における所謂「南島路」（九州から沖縄を経由して福建へ至るルート）を通じた日中通交の活発化という事態が想定できる。これは、元末の動乱に伴って浙江海域の航行が危険な状態となり、これを回避する目的で、日本から中国寧波へ至る既存のルートとは異なる経路（九州—沖縄—寧波）が利用されるようになった事象と考えられている（榎本渉2007）。また、この推測を裏付けるものとして、肥後・高瀬津（南朝側の菊池氏が支配）がこの頃より対中交易の窓口として俄に繁栄を迎えるという事実も指摘できる（橋本雄2005）。そしてこれらの動向と軌を一にして、沖縄列島では14世紀中葉以降、当時のものと推定される中国製貿易陶磁の出土が激増すると報告されており（亀井明德1993・1997）、元朝末期から中国沿海部と沖縄との接触が急速に頻繁になっていく様相は出土遺物の状況からも窺える。

元末における「南島路」浮上は、日本からの「琉球（＝沖縄）」情報の入手という前述の仮説を補強する好材料となろう。周知のように、一連の日明交渉の過程において洪武政権が当初接触した日本側勢力は、北九州に本拠をおく南朝＝征西府勢力であった。「南島路」の日本側窓口のひとつとされる高瀬津を支配した肥後菊池氏は、南朝側に属する勢力でもあった。ここに洪武政権と「南島路」に関する情報とを結び付ける経路が浮かび上がってくる。「南島路」を通じた通交の活発化を背景にして、征西府勢力との接触により明朝は「琉球（＝沖縄）」情報を獲得した、と考えるのはごく自然な推定だろう。元末に胎動したあらたな歴史動向が「琉球（＝沖縄）」情報を明朝中国にもたらし、ひいては「琉球」3王国（中山・山南・山北）と明との朝貢関係樹立へ向かわせる原動力になっていったと考えられる<sup>(17)</sup>。

以上のように、明の洪武政権が日本を通じて沖縄に関する情報を入手し、また日本から得られた情報だったからこそ、宋元以来の「琉球（＝台湾）」ではなく、洪武政権は中世日本の認識する「琉球（＝沖縄）」へその使者を向かわせることになったのであろう。3王冊封に至る一連の過程は、中世日本の認識が明朝中国に流入・定着していったことを示す事象として捉えられる。



その後、宋元＝鎌倉期の「琉球」認識の並存状態が変容することで、日中で別個に把握されていた対象（沖縄と台湾）はともに「琉球」と認知されていく。つまり、ふたつの認識が明初の中国で融合ないし混淆され、「琉球」は沖縄・台湾を包括する呼称となっていったのである。次の史料をみよう。

（洪武）七年甲寅（1374）、海上の警聞え、（呉禎）復た沿海各衛軍を領いて出捕し、流球大洋に至り、人・船若干を獲、俘は京に送る。上、益々之に嘉頼し、（呉禎）常に海道を往来し、機務を総理す。

七年甲寅、海上警聞、復領沿海各衛軍出捕、至流球大洋、獲人船若干、俘送于京。上益嘉頼之、常往来海道、総理機務。

＜劉崧『槎翁文集』巻18「靖海侯追襲封海國公諡襄毅呉公神道碑銘」＞引用文（洪武13〔1380〕年の作成）は、洪武5年の中山王冊封以降も台湾が依然として「琉球」と呼ばれていたことを窺わせる史料である。もっとも、ここに記される「流球大洋」について、先行研究では沖縄近海を指していると理解されたりもしている（たとえば曹1988）。だが、ことはそう簡単にはいかないように思われる。それは、前出史料と類似した表現をもつ記述が実は元末にも見出せるためである。程端礼『畏斎集』巻6「故中奉浙東道宣慰都元帥兼蕪湖翼上万户府達魯噶齊諤勒哲図公行状」の一節には、

是年（至元6〔1340〕年）冬十一月……時に海寇、復た隙に乗じて猖獗し、糧艘多く殺さる。……（浙東道宣慰都元帥オルジェイト）渠魁周麻千等と韭山の南に遇い、……<sup>しばしば</sup>屢々流求国界に直抵し、之に及びて遂に全獲す。

是年冬十一月……時海寇復乗隙猖獗、糧艘多被殺。……遇渠魁周麻千等于韭山之南、……屢直抵流求国界、及之遂全獲。

とある。元末における海賊退治の顛末を記したこの史料では、元将オルジェイトがたびたび「流求国界」にまで至って海賊掃討を行った事跡が語られている。これまでの考察を踏まえると、宋代以来の認識を引き継ぐ元代の史料であり、また沖縄方面に比定すべき特段の事由も見出されないので、引用史料の「流求」は台湾方面のことを指していると考えられる。とすれば、元末の当該史料が記す「流求」と明初の呉禎神道碑にあった「琉球」は、前者が台湾で、後者が沖縄である、というふうに機械的に分けよとのだろうか。しかし、このように処理してしまうことには若干問題を感じる。

なぜなら、海賊を「琉球」近海まで追いかけて退治したという類似表現の元末と明初における存在は、次のような理解の可能性を有していると思われるからである。同様な表現が複数の史料で存在している点に留意するなら、前出史料にみられる「流求」・「琉球」の単語は、東の遠海（波荒いシナ海域）をイメージさせる象徴的な言葉として使われていると理解することが可能であり、その近海に至ったとの記述も東海での海賊退治という難業の達成を賛美する際に用いる「常套句」といった趣さがある。ならば、中山王冊封後の出来事に属しているとはいえ、呉禎神道碑が記す洪武7年に到達した「琉球大洋」を、無条件で沖縄近海と理解してしまうのは少々問題があろう。明初の事例に先行して、すでに元末段階で類似の「常套句」がみられた点を重視するなら、むしろそれは台湾近海をイメージして語られていると理解した方が無難である<sup>(18)</sup>。

そもそも洪武5年の冊封直後、明人が「琉球」という名称で沖縄方面を具体的にイメージできていたとは思えない。元末明初の浙東人・胡翰が遣使より帰還した楊載を讃えた、『胡仲子集』巻5「贈楊載序」は次のように記す。

（洪武）五年秋、流球、表を奉じ、（楊）載に従いて入貢す。……（元・至元中）流球を取らんことを議し、閩人・呉誌斗の言を用い、師を出ださずして使を遣わして往きて其の国を諭さんとし、

泉南（泉州）に留まること久しと雖も、訖<sup>つい</sup>に達する能わずして罷む。

五年秋、琉球奉表、従載入貢。……議取琉球、用閩人吳誌斗之言、不出師而遣使往諭其国、留泉南者雖久之、訖不能達而罷。

洪武5年における中山王使節の入貢に際して、胡翰は沖縄のことを、前代より中国と接触のあった「琉球」と認識していた。前代以来の「琉球（≡台湾）」とあらたに朝貢した「琉球（＝沖縄）」を混同している事例が存在することに示されているように、沖縄と台湾というふたつの「琉球」を、明人が当初より別個の存在として明瞭に識別できていたかどうかさえ実は定かではない。結局、前出の呉禎神道碑が示唆するように、冊封以後に書かれた史料に登場する「琉球」であっても、それが沖縄を排他的に指している保証はどこにもなく、なかには台湾とみた方がよい事例も存在すると考えるべきなのである。ここから導かれるのは、冊封後にも台湾は沖縄とともに「琉球」と呼ばれていたとの認識である。両者が洪武初年に同じ名称で一括されていたからこそ、のちに沖縄と区別して表記されるようになって、台湾は依然として小「琉球」の名で呼ばれ続けたのである。

すでに論じた通り、宋元期の「琉球」認識はユレのある曖昧模糊としたもので、この地点に存在して他所ではあり得ない式の確固たる共通認識が形成されていた訳ではない。従って、福建の東海にある島として漠然と認識されていた宋元以来の「琉球」の記憶が日本との接触を契機として沖縄と結び付けられていくのも、さほど不可解なことではない。所詮、「琉球（≡台湾）」に関する乏しい情報に基づく宋元期の認識は、明代に「琉球（＝沖縄）」が浮上することにより変容してしまうような、脆く流動的な認識でしかなかった。

かつて認識していた台湾が誤りで、沖縄こそが本当の「琉球」である、といった認識の自覚的転換が明初に存在したようにはみえず、またこれを窺わせる痕跡も同時代史料からは検出できない。というより、中国側の認識する「琉球」の範囲は既存の台湾方面だけでなく、さらに沖縄方面へも広がっていったように見える。そして前代までの「琉球」に関する情報は、何の疑問も差し挟まれることなく、沖縄に関する情報として明人に認知されていたのである。このような自覚されざる認識の変容を可能にしたひとつの要因が、前述した宋元期における「琉球」認識のユレだったといえる。

洪武5年の冊封以後の「琉球」認識の推移を中国側から眺めると、次のようになる。明初に在来<sup>（19）</sup>のふたつの認識が融合され、中国の認識する「琉球」の範囲が沖縄までを包含していった結果、沖縄と台湾がひとつの名称（「琉球」）で呼ばれるようになる。その後、両者を区別する呼称（「大琉球」・「小琉球」）が生まれ、日中で別個に存在したふたつの認識はひとつの共通認識に整序されていった、と。これこそが、王圻『統文獻通考』などに典型的にみられる後人の認識（「其の国に大琉球・小琉球有り」—琉球国にはふたつの「琉球」が存在し、それが「大・小琉球」であるとの認識—）なのである<sup>（19）</sup>。かくて台湾は依然として「琉球（小琉球）」と呼ばれ続けるものの、以前から中国と断続的に接触のあったのは沖縄（「大琉球」）であると認識されていたのである。

#### 4. 「大琉球」・「小琉球」の成立

前章で考察したように、日中のふたつの認識が融合され、「琉球」という名称のなかに台湾と沖縄が包含される状況が形成されたのち、台湾と沖縄を区別する呼称（「大・小琉球」）もやがて生まれ、「琉球」認識はひとつの共通認識のもとへ整序されていった。とはいえ、「大・小琉球」の名称の成立過程を実証的に論じることは、同時代史料が乏しいこともあって容易ではない。勿論、これらの名称が明・洪武年間に入って成立したものであるとは、一般に認識されている。しかし、より具体的な成立時期については、これまで定説がない。というより、時期の特定に関心が向けられることはそもそ

も殆どなかった。おそらく「大・小琉球」は、明の「琉球（＝沖縄）」遣使を契機に台湾との区別のため成立したと漠然と認識されていたため、とくに詮索されることもないまま現在に至ったと推察される。

そこで同時代史料に基づき、「大・小琉球」の登場する時期を確認しておく、これらの呼称は洪武20年代（1390年代）までに出現している。かつて秋山謙蔵・小葉田淳らが指摘したように（秋山1929、小葉田淳1942）、その初見は『明太祖実録』洪武25（1392）年5月己丑の条における次の史料に求められる。

琉球国民才孤那等二十八人を遣わして国に還らしめ、人ごとに鈔五錠を賜う。初、才孤那等、舟を河蘭埠に駕して硫黄を採らんとすも、海洋に於いて大風に遇い、飄たふよいて小琉球界に至り、取水して殺さるる者八人、余は脱するを得。又た風に遇い、飄たふよいて惠州海豊に至り、邏卒の獲る所と為り、言語通ぜずして、以て倭人と為し、転送して京に至る。其の国の遣使の入貢するに値あたり、為に其の事を白つげ、遂に皆遣還せしむ。

遣琉球国民才孤那等二十八人還国、人賜鈔五錠。初、才孤那等駕舟河蘭埠採硫黄、於海洋遇大風、飄至小琉球界、取水被殺者八人、余得脱。又遇風、飄至惠州海豊、為邏卒所獲、言語不通、以為倭人、転送至京。值其国遣使入貢、為白其事、遂皆遣還。

「琉球（＝沖縄）」人たちの明国漂流という洪武25年の出来事を伝える記述中に、惠州へ漂流する以前に流れ着いた場所として「小琉球」の名が登場する。史料には直接みられないものの、「小琉球」が存在する以上、「大琉球」もこの時すでに存在していたと見做せる。

この洪武25年の初見史料以降、数は多くないものの、他の同時代史料（『皇明祖訓』『祖訓首章』、『明太祖実録』洪武30年8月丙午の条など）でも、「大・小琉球」の語が見出せるようになる。よって、これらの呼称は洪武末年までには確実に成立している。だが他方、現在知られている限り、洪武25年より早い時期にそれらを見出すこともできない<sup>(20)</sup>。このことはいったい何を意味しているのであろうか。

「大・小琉球」の成立時期を探るひとつの手掛りとして、『祖訓録』『箴戒』における以下の記述が注目される。

凡そ海外夷国、安南・占城・高麗・暹羅・琉求・西洋・東洋及び南蛮諸小国の如きは、山を限りて海を隔て、一隅に僻在す。

凡海外夷国、如安南・占城・高麗・暹羅・琉求・西洋・東洋及南蛮諸小国、限山隔海、僻在一隅。引用部分は所謂「不征国」に関する著名な条文の一節である。『祖訓録』は洪武28（1395）年編纂の『皇明祖訓』の前身となる書物で、その最初の版は洪武6（1373）年の成立にかかるが、前引史料をのせるテキスト自体は洪武14（1381）年頃に成立したと推定されている（黄彰健1961）。当該史料では「琉求」のみが記され、「大・小琉球」の文字はみられない。ところが、『祖訓録』の当該部分に相当する条文を載せた『皇明祖訓』『祖訓首章』は、

大琉球国（割注）朝貢不時にして、王子及び陪臣の子、皆入太学に入りて読書し、礼待甚だ厚し。

小琉球国（割注）往来を通ぜず、曾つて朝貢せず。

大琉球国朝貢不時、王子及陪臣之子、皆入太学読書、礼待甚厚。

小琉球国不通往来、不曾朝貢。

となっており、そこに「大・小琉球」が確認できる。つまり、洪武14年以前に書かれた『祖訓録』では「琉求」と書かれていた部分が、洪武28年の『皇明祖訓』になると、「大琉球国（＝沖縄）」・「小琉球国（＝台湾）」に書き改められているのである。このことから、洪武14年頃に「大・小琉球」はい

まだ存在していない可能性も浮上してくる。

勿論、さきに引用した2史料における記載の相違という点のみから、件の名称がまだ成立していなかったとの結論をただちに導き出すことはできない。『祖訓録』の書かれた時（洪武6～14年の間）に「大・小琉球」の語はすでに存在していて、単なる文章表現上の都合から、明朝にとってあまり重要な存在ではない「小琉球」が省かれ、結果として「琉球」のみの記述になったと解釈する余地も残されている。事例検出の有無と当該名称の有無は、あくまで別次元の事柄に属する。

とはいえ、洪武5年の時点では「琉球（＝沖縄）」とすでに接触していたので、もっと早い時期に「大・小琉球」の文字が検出されてもよいはずだが、既述の通り、洪武25年以前の史料には、沖縄も台湾も単に「琉球」と記されるのみであった。いまのところ洪武20年代より以前に両者を区別する呼称は確認できないのである。これに加え、「大・小琉球」を記す史料が洪武20年代に入って俄かに散見されるようになる、というさきに指摘した点なども考慮すると、これらの名称が洪武初年の段階、さらには洪武10年代になっても成立していなかった可能性はやはり高いように思われる。現今の史料状況からは、洪武5年の「琉球国」中山王の冊封以降、台湾と沖縄をともに「琉球」と呼ぶようになる段階がまず存在し（「ふたつの琉球」から「ひとつの琉球」へ）、その後に「大・小琉球」の名称が成立する、と想定しておくのがひとまず穏当であろう<sup>(21)</sup>。

そして、いま述べた明初における「琉球」認識の変容と関連して、龍谷大学所蔵「混一疆理歴代国都之図」（以下、龍谷本「混一疆理図」と略記）における「琉球」の記載が注目される。アフリカ大陸まで描かれた「世界地図」として著名な本図は、元末に作成された2枚の中国製地図（清濬「混一疆理図」と李沢民「声教広被図」<sup>(22)</sup>）を底図とした原図（簡略だった朝鮮と日本の部分を増補して1402年に朝鮮で作成されたもの。以下、原本「混一疆理図」と略記）の上に、さらに改定を施して1470年代頃に成ったものである<sup>(23)</sup>。龍谷本「混一疆理図」は当時の東アジアにおける「琉球」認識の一端を窺い知ることができる貴重な資料といえる。

さて、龍谷本「混一疆理図」における「琉球」方面の略図を参照すると（図6）、そこには「琉球」と「大琉球」が描かれている。台湾は「琉球」とのみ記され、「大琉球（沖縄）」と並記されている点が興味深い。これが単に「小」字の脱誤でないならば、なぜこのような変則的記載になっているのだろうか。この点について憶測を逞しくすれば、次のような可能性が考えられる。即ち、元末の中国製地図にはもともと「琉球」の記載しかなかったのが、原本「混一疆理図」の作成時か、あるいはその後の改定過程で「大琉球」の情報が付け加えられ、「琉球」「大琉球」の列記になった、と<sup>(24)</sup>。つまり、龍谷本「混一疆理図」の記載は、中国における既存の認識（「琉球」≡台湾）があらたな

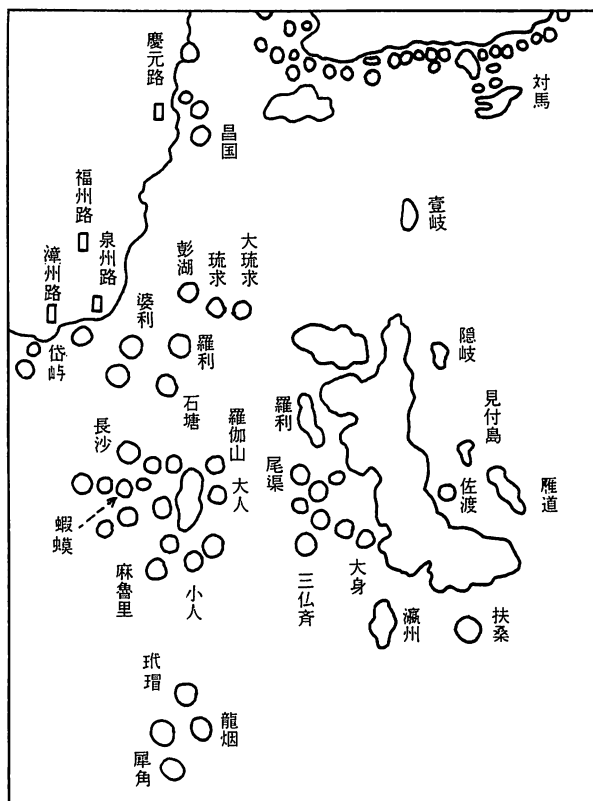


図6 龍谷大学所蔵「混一疆理歴代国都之図」略図  
(弘中1988より)



認識（「大・小琉球」）へ変容したことをうけ、「琉球」の東側に「大琉球」が書き加えられた結果と考えられないか、ということである。そうであるなら、龍谷本「混一疆理図」における件の記載は、まさに本項で論じた明初における「琉球」認識の変容過程の痕跡を残すものと捉えることができるだろう。

## 小結

本稿で指摘した13・14世紀の日中における異なる「琉球」認識の並存という事象は、当時、中国と琉球列島との接触・交流（そしてまた「南島路」を通した日中通交）が希薄であったことを端的に示すものとして評価できる。なぜなら、中国と琉球列島との間の隔絶状態こそが、日中間の「琉球」認識に分裂をもたらした最大の要因と考えられるからである。この点は近年の古琉球史研究における歴史認識ともそれ程齟齬しない理解といえる。ただし、この「隔絶状態」という表現は、中琉間の接触がのちの時代と比べて希薄であったことを述べているに過ぎず、明朝成立以前に両者の間でまったく接触がなかったということをただちに意味しない。中央や一般レベルでの地理的認識の変化は、一定の相互交流の成熟を経た上でもたらされるものと考えられるため、そのような成熟過程の前段階が存在して然るべきだからである<sup>(25)</sup>。

最後に、これまでの考察を通じて興味深く感じられた事柄をひとつ記し、本稿を締めくくりたい。それは13・14世紀の「琉球」認識と現今の学説対立状況との類似性である。屢述したように、『隋書』以降「琉球」の所在地をめぐるのは、現在、台湾説（中国で優勢な見解）と沖縄説（日本・台湾で根強い見解）の有力2学説が並存している。奇しくもそうした状態は、本稿で論じた13・14世紀の東アジアにおける異なる「琉球」認識の並存状況と似通ってみえる。ふたつの主要学説の対立という現在の状況は、かつての「琉球」認識の並存にその歴史的淵源があると理解することがあるいは可能なものかもしれない。つまり、13・14世紀の「琉球」をめぐる諸学説は、過去の認識（しかも多分にユレのあるそれ）に規定されて形成された認識、ないしは現代におけるその「再現」といえるのではないか、ということである。

## 注

- (1) ただし、宋元期の「琉球」に関していえば、一般的に台湾説が優勢といえる（沖縄説も根強く存在している）。周知のように、『隋書』「流求国伝」をめぐるのは、これまでに膨大な議論がある。しかし、本稿は13・14世紀の同時代史料から窺える「琉球」認識の様相に検討の対象を限定しているため、『隋書』「流求国伝」をめぐる諸問題は考察の範囲外にある。なお、『隋書』以来の「琉球」に関する研究動向については、山里純一による包括的な学説整理（山里1999a）、藤善真澄訳注の『諸蕃志』「流求国」についての解説（藤善1991）、田中聡の手になる簡潔な研究史整理（田中1999）等があり、それぞれ要を得た論点の整理が行われている。併せて参照されたい。
- (2) 黎山千仞摩蒼穹、顛顛独在大海中。自從漢武置兩郡、黎人始与南州通。歴歴更草不勝計、唐設五筦如容邕。皇朝声教久漸被、事体全有中華風。生黎中居不可近、熟黎百洞蟠疆封。或從徐聞向南望、一粟不見波吞空。靈神至禱如響答、征帆飽掛輕飛鴻。曉行不計幾多里、彼岸往往夕日春。琉球・大食更天表、舶交海上俱朝宗。勢須至此少休息、乘風徑集番禺東。…（以下省略）…
- (3) このほか「琉球」=中国東南海の最果ての島という抽象的イメージの存在を窺わせる史料として、南宋・胡銓『胡澹庵先生文集』巻11「答呂機宜」、元・宋本「船上謡」（蘇天爵『国朝文類』巻4、所収）などがあげられる。

- (4) 本章で引用する陸游の詩の作成年代は、銭仲聯1985の見解に従っている。なお、同書が存在ならびに陸游詩の解釈については、鹿児島大学の高津孝教授より示教をうけた。ここに記して謝意を示す。
- (5) 久坐意不懌、掩卷聊出遊。一筇吾事足、安用車与騶。浮生了無根、兩踵塌百州。常憶航巨海、銀山卷涛頭。一日新雨霽、微茫見流求。在福州泛海東望、見流求國。西行亦足快、縱獵南山秋。騰身刺猛虎、至今血濺裘。命薄每自笑、校尉略已侯。短劍隱市塵、浩歌醉江樓。頗疑屠博中、可与共奇謀。丈夫等一死、滅賊報國讎。徙倚万里橋、寒日墮前洲。
- (6) 行年三十憶南遊、穩駕滄溟万斛舟。常記早秋雷雨霽、柁師指点說流求。
- (7) 趙汝适『諸蕃志』「流求国」  
流求国、当泉州之東、舟行約五六日程。……無他奇貨、尤好剽掠、故商賈不通。  
汪大淵『島夷誌略』「琉球」  
(琉球) 自澎湖望之甚近。……海外諸国、蓋由此始。  
『元史』卷19、成宗本紀2  
元貞3〔1297〕年2月) 己未、改福建省為福建平海等處行中書省、徙治泉州。平章政事高興言、泉州与瑠求相近、或招或取、易得其情。故徙之。
- (8) 「古今華夷区域惣要図」および「東震旦地理図」については、室賀信夫1956、鄭錫煌1990、海野隆一1999、沖縄県史料編集室2003などを参照のこと。
- (9) 栗棘庵所蔵「輿地図」については、森鹿三1941、森克己1951、青山定雄1955、黄盛璋1990、海野1999を参照。  
ちなみに、室賀信夫は、今日散逸してしまった唐・賈耽「海内華夷図」には、「華夷区域図」や「輿地図」のごとく中国東海に「琉球」が記されていた可能性を指摘している(室賀1956、114～15頁)。もし仮にその通りであれば、「華夷区域図」・「輿地図」より窺える「琉球」についての地理的認識は、その淵源を唐代にまで遡れることになる。
- (10) 汪大淵『島夷誌略』「琉球」  
他国之人、倘有所犯、則生割其肉以啖之、取其頭懸木竿。
- (11) 金沢文庫本「日本図」については、秋岡武次郎1955、応地利明1996、海野1999、黒田日出男2003、沖縄県史料編集室2003などを参照のこと。
- (12) 妙本寺本「日本図」については、黒田2003、坂井法暉2003などを参照のこと。
- (13) なお、高橋2002は、『漂到琉球国記』などにみられる「琉球」認識が中世建密仏教界の一部に限られ、当時の人々の一般的認識とはいえないと指摘している。
- (14) 本文のように考えることが可能としても、ふたつの「琉球」認識の並存という状態はいつ頃から定着したのかという重要な疑問が依然として残る。しかし残念ながら、この点に関して現時点では不明とせざるを得ない。『隋書』の「琉球」問題論争とも関わり、明確な根拠を提示した論証を行うことは至難である。とりわけ、日本において「琉球」=奄美以南の「南島」という認識がいつ頃定着するのかがさきの疑問を解くカギになると考えるが、これらの問題の解明は現在の筆者の能力を超えている。当該問題については関連分野(古代・中世日本の「南島」史研究など)の専門家より示教を乞いたい。ちなみに、村井章介は、〈浄—穢の同心円〉的世界像に基づいて、「内外の境目は、東の外が浜、西の鬼界島(硫黄島)に代表される帯状のひろがり」としてイメージされる中世日本の領域像形成の起点を9世紀頃におき、さらにこの領域像の形成にともない、従来『南島』として一括されていた琉球弧の列島は「内国化した多祢・掖玖、境界としての喜界島、異域としての琉球に三分されることになった」とみている(村井1990)。
- (15) 明洪武初、行人楊載使日本、帰道琉球、遂招之。其王首先帰附、率子弟来朝。太祖嘉其忠順、賜符即章服及閩人之善操舟者三十六姓、令往来朝貢。

- (16) 『明太祖実録』を一瞥すれば、明朝成立直後の周辺地域に対する招諭使節の派遣状況は、洪武元年（高麗・安南）、同2年（日本・占城・爪哇・雲南等）、同3年（吐蕃・暹羅・三仏齊・渤泥・真臘等）といった具合になっている。

- (17) 断片的な史料ではあるものの、同時期の中国側でも、その沿海部から「琉球（＝沖縄）」への人の移動・交流を伝える史料は検出可能である。よく知られたものとして、『明太宗実録』永楽9（1411）年月癸巳の条に、

琉球国中山王思紹、遣使坤宜堪彌等、貢馬及方物。……又言、（長史・程）復饒州人。輔其祖察度四十余年、勤誠不懈。今年八十有一。請命致仕、還其郷。從之。

と記す、元朝末期の1350年代頃に琉球へ渡って中山王察度（在位1350～95）に40数年仕えた江西（元代は江浙行省所属）饒州（福建西北部に隣接した土地）出身の程復の事例がある。研究者によっては、程復の入琉を洪武5年の中山王冊封以後とする見解もあるが（佐久間1975）、本文を文字通りに解釈すれば（入琉の時期を永楽9年の時点から計算しても、洪武5年より早い時期のことになる）、その移住は冊封以前のことになる。引用史料にある通り、元末の中国沿海部と「琉球（＝沖縄）」の間には確かに人的交流が存在していたと考えられる。

なお、元代の中琉通商を示す史料として、康熙『重修崇明県志』巻14、逸事志の記述（「朱清・張瑄、元初自崇徙太倉、以海運開市舶司、通日本・琉球諸島、商貨駢集、遂成東南大都會、号大国馬頭。」）が、おもに日本中世史家によってしばしば引用される。しかし、その「琉球」に関する記載が後代の「増補」に係り、当時の状況を記した証拠と見做せないことについては、榎本渉によってすでに詳述されているところである（榎本2007、202～04頁）。

- (18) 同様な表現のみられる史料はほかにも存在する。たとえば、「航海侯」張赫の事跡を綴った、『明太祖実録』洪武23（1390）年8月甲子の条には、

航海侯張赫卒。赫、鳳陽臨淮石亭村人。……（洪武）六年、率舟師巡海上、遇倭寇、追及于琉球大洋中、殺戮甚衆、獲其弓刀以還。

とあり、福建都指揮同知であった張赫が洪武6（1373）年に倭寇を追って「琉球大洋中」にまで至り、これを多数「殺戮」したとの武勲を記している。ちなみに、引用史料にある「琉球大洋」について、和田久徳・池谷望子・内田晶子・高瀬恭子2001は、「福建の水軍は備倭を主務とし」、その「哨戒の範囲（信地）は沿海部であり、沖縄近海まで倭寇を追撃していったとは考えにくく」、「また明清代、江口の外を大洋（あるいは大海）としていた」ことなどから、「小琉球（＝台湾）周辺の外洋」であろうと理解している（77～78頁）。

- (19) 『続文献通考』巻235、四裔考・東南夷・琉球

按、琉球在中国之正南偏東、漳・泉・興・福四州界内、澎湖諸島与之相对、亦素不通。……其国有大琉球・小琉球。

- (20) なお、一般に元代の著作とされる周致中『異域志』巻上「大琉球国」「小琉球国」の条には、

（大琉球国）在建安之東、去海五百里。其国多山洞、各部落酋長、皆称小王、至生分彼此不和、常入中国貢、王子及陪臣、皆入太学讀書。

（小琉球国）与大琉球国同。其人龔俗、少入中国、風俗与倭夷相似。

といった「大琉球」「小琉球」に関する記述が存在するものの、そこには明らかに明代のものと思われる記述（「常入中国貢、王子及陪臣、皆入太学讀書」）が含まれているため（つまり後人の手による文章の改変・挿入等の可能性がある）、当該史料の存在をもって「大琉球」「小琉球」の名称が元代に存在していた証拠とすることはできない。

- (21) もし洪武20年前後に「大・小琉球」の名称が成立したとするなら、そこにはどんな背景が存在していたのか。この点に関しても明確な証拠に基づいて回答を提示することはできない。ただ、強いて推量するなら、ひとつの可能性として倭寇問題との関連が想起される。なぜなら、「大・小琉球」が文献上で確認できるようになる洪武

20年代前後の時期は、ちょうど明朝政権が倭寇掃蕩の事業に本腰を入れ、浙江・福建を中心とする中国東南沿海部・島嶼部において、湯和等による海防体制の整備・強化が進められた時期と重なるからである。この時の海防体制強化は、日本との外交交渉を通じた倭寇沈静化策が暗礁に乗り上げたことがその背景にあったという（黄中青2001、22～23頁）。

湯和の主導による海防体制の強化が着手された洪武20年前後をピークとして、城塞建設や衛所増設、守備兵の調発・増配が東南沿海部で進められると共に、倭寇と海民の結託を予防するため、沿海部に近接した島嶼の無人島化も実施されていく（尹章義1977、鄭克晟1991、黄2001、檀上寛2003・2007）。福建方面の場合、洪武20（1387）年4月に周徳興が中央から派遣され、その指揮のもと城塞建設、海防組織や配備兵員の増強が図られる。また同時に、福建沿海の島嶼部や台湾に最も近接した澎湖嶼島などは、その住民を内地に強制移住することで無人島化された。

加えて、洪武20年前後に本格化する海防強化の過程では、その体制構築のために沿海情報の収集も行われている。たとえば『明太祖実録』洪武20年4月戊子の条には、

命江夏侯周徳興往福建、以福・興・漳・泉四府民戸三丁取一、為縁海衛所戍兵、以防倭寇。其原置軍衛、非要害之所、即移置之。徳興至福建、按籍抽兵、相視要害可為城守之处、具図以進。

とあり、周徳興が福建沿海部の「城守を為すべき」要害に関する地図を作成して中央政府に提出していた。倭寇に対する防衛ラインを島嶼部に設けていく上で、明朝やその武将等が東南沿海部一帯の地理的認識をより明瞭なものとする必要性も当然あったはずである。洪武20年前後、明軍による沿海・島嶼部に対する海防・調査等の活動が大々的に展開されるなか、福建東海域との接触の機会も頻繁になり、当該域に対する認識も自ずと深まっていっただろう。その結果、福建東海に浮かぶ台湾は明の中央政府によって俄然注視されるに至り、従来同一の名称（「琉球」）で括られていた沖縄と台湾を区別するため、「大琉球」・「小琉球」の呼称が生み出された、という可能性も十分に考えられる（あくまで推論に推論を重ねた想定の出ないが）。このような想定に一定の妥当性が認められるなら、「大・小琉球」の成立は、単に「琉球（＝沖縄）」の朝貢といった要因だけでなく、当時の東アジア海域の情勢（とりわけ日明関係の推移）とも密接に関わっていたと捉えられるだろう。

- (22) 清濬「混一疆理図」と李沢民「声教広被図」に関しては、青山1938、海野1967、高橋正1975、宮紀子2006・2007などを参照。
- (23) 龍谷本「混一疆理図」については、小川琢治1928、青山1938、高橋1963、弘中芳男1988、海野1999、杉山正明2000、李燦2005、宮2006・2007、藤井譲治・杉山正明・金田章裕2007などを参照。
- (24) しかし、こうした想定とは異なる見解も存在している。たとえば近年、宮紀子は、清濬「混一疆理図」を「広輪疆理図」と題して載せる、38巻本系の明・葉盛『水東日記』（「初版本の姿をほぼ忠実に伝える」とされる）巻17所収の地図（明人・嚴節の手になる改定版）が「大・小琉球」を描いていることに基づき、原本「混一疆理図」の依拠した清濬「混一疆理図」にも「大・小琉球」の記載がすでに存在したと推測している（宮2007、50頁）。これは「大・小琉球」の呼称成立が元代に遡るとみる見解であろう。確かに『水東日記』所収「広輪疆理図」は、元末の清濬「混一疆理図」の姿をかなり忠実に伝えているようであり、また既述のように、元末には日本と中国とを結ぶ「南島路」が活発化するので、そのような想定も十分に可能だろう。

とはいえ、「広輪疆理図」は後人の手が入った明代（15C中葉）の改訂版であり、「大・小琉球」の部分が明代に増補された情報である可能性もなお排除できない（これは、李沢民「声教広被図」を「最も忠実に」「踏襲している」とされ<海野1967>、かつ「大・小琉球」の記載のある、明・嘉靖間刊の羅洪先『広輿図』所収「東南海夷図」にも同様のことがいえる）。むしろこれまでの考察を踏まえるなら、「大・小琉球」の情報は明代の増補である可能性の方がやはり高いように思われる。「広輪疆理図」とは別の論拠があらたに提示されない限り、元末の段階で「大・小琉球」の呼称が存在したとする宮の見解には俄かに従い難い。今後、現在公開の写真では地



名読解の困難な、中国第一歴史档案館所蔵「大明混一図」（その成立は洪武22〔1389〕年頃である＜汪前進・胡啓松・劉若芳1995＞とも、またこの頃に作成されたものを底図として嘉靖・万暦期以降に成立した＜宮2006＞とも推測されている「声教広被図」系の情報を伝える地図）などの資料が活用可能になれば、あるいは前記の問題にも一定の結論が得られるのかもしれない。

- (25) 明朝成立以前における中琉間の交流の可能性は、本科研の所謂「粗製磁器」に関する考古学分野の研究成果によっても示唆されているところである。

#### 参考文献

- 青山定雄 1938 「元代の地図について」『東方学報 東京』 8  
—— 1955 「栗棘庵所蔵の輿地図」『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』吉川弘文館、1969年、所収  
秋岡武次郎 1955 「鎌倉、室町時代の行基式日本図」『日本地図史』河出書房、所収  
秋山謙蔵 1929 「隋書流求国伝の再吟味」『歴史地理』54-2  
尹章義 1977 「湯和与明初東南海防」『国立編訳館館刊』6-1  
海野一隆 1967 「広輿図の資料となった地図類」『大阪大学教養部研究集録 人文・社会科学』15  
—— 1999 『地図に見る日本』大修館書店  
榎本渉 2007 「元末内乱期の日元交通」（初出2002年）『東アジア海域と日中交流一九～一四世紀一』吉川弘文館、所収  
汪前進・胡啓松・劉若芳 1995 「絹本彩絵大明混一図研究」曹婉如ほか編『中国古代地図集 明代』文物出版社、所収  
応地利明 1996 『絵地図の世界像』岩波書店  
小川琢治 1928 「支那地理図学の発達」『支那歴史地理研究』初集、弘文堂、所収  
沖縄県史料編集室 2003 『古地図にみる琉球（沖縄県史ビジュアル版12・古琉球1）』沖縄県教育委員会  
亀井明德 1993 「西南諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11  
—— 1997 「琉球陶磁貿易の構造的な理解」『専修人文論集』60  
黒田日出男 2003 『龍の棲む日本』岩波書店  
黄寛重 1987 「南宋『流求』与『毘舍耶』的新史料」中琉文化経済協会主編『第一屆中琉歴史関係国際学術会議論文集』聯合報文化基金会国学文献館、所収  
黄彰健 1961 「論皇明祖訓録頒行年代並論明初封建諸王制度」『明清史研究叢稿』台湾商務印書館、1977年、所収  
黄盛璋 1990 「宋刻輿地図綜考」曹婉如ほか編『中国古代地図集 戦国～元』文物出版社、所収  
黄中青 2001 『明代海防の水寨与遊兵』明史研究小組  
小葉田淳 1942 「台湾古名随想」『日本経済史の研究』思文閣出版、1978年、所収  
坂井法暉 2003 「日蓮の対外認識を伝える新出資料—安房妙本寺本「日本図」とその周辺」『金沢文庫研究』311  
佐久間重男 1975 「明代の琉球と中国との関係—交易路を中心として—」『日明関係史の研究』吉川弘文館、1992年、所収  
下郡剛 1999 「『漂到琉球国記』成立の背景—作者慶政と松尾社—」『立正史学』86  
杉山正明 2000 「アフロ・ユーラシア・サイズの歴史像」『世界史を変貌させたモンゴル—時代史のデッサン』角川書店、所収  
銭仲聯校注 1985 『剣南詩稿校注』全8冊、上海古籍書店出版社  
曹永和 1963 「台湾の開発与経営」『台湾早期歴史研究』聯経出版事業公司、1979年、所収  
—— 1988 「明洪武朝の中琉関係」『中国海洋史論集』聯経出版事業公司、2000年、所収（外間みどり訳「明洪

- 武期の中琉関係』『浦添市立図書館紀要』4、1992年)
- 曹永和ほか 2001 「座談会 東アジア海域のネットワーク」『海のアジア5』岩波書店、所収
- 高橋公明 2002 「文学空間のなかの鬼界ヶ島と琉球」『立教大学日本学研究所年報』1
- 高橋正 1963 「東漸せる中世イスラーム世界図—主として混一疆理歴代国都之図について—」『龍谷大学論集』374
- 1975 「元代地図の系譜—主として李沢民図系地図について—」『待兼山論叢』9
- 田中聡 1999 「古代の南方世界」『歴史評論』586
- 檀上寛 2003 「方国珍海上勢力と元末明初の江浙沿海地域社会」京都女子大学東洋史研究室編『東アジア海洋域圏の  
史的研究』京都女子大学、所収
- 2007 「『国初寸板不許下海』考」『山根幸夫教授追悼記念論叢 明代中国の歴史的位相 下巻』汲古書院、  
所収
- 鄭克晟 1991 「明朝初年の福建沿海及海防」『史学月刊』1991-1
- 鄭錫煌 1990 「関于『仏祖統記』中三幅地図芻議」曹婉如ほか編『中国古代地図集 戦国—元』文物出版社、所収
- 橋本雄 2005 「肥後地域の国際交流と偽使問題」(初出2002年)『中世日本の国際関係』吉川弘文館、所収
- 弘中芳男 1988 「古代中国における日本の地理像—〈研究ノート〉「混一疆理歴代国都之図」考—」(初出1983年)  
『古地図と邪馬台国—地理像論を考える—』大和書房、所収
- 藤井譲治・杉山正明・金田章裕編 2007 『大地の肖像—絵図・地図が語る世界』京都大学学術出版会
- 藤善真澄訳注 1991 『諸蕃志』関西大学東西学術研究所
- 宮紀子 2006 「『混一疆理歴代国都之図』への道—14世紀四明地方の「知」の行方—」(初出2004年)『モンゴル時代  
の出版文化』名古屋大学出版会、所収
- 2007 『地図は語る—モンゴル帝国が生んだ世界図』日本経済新聞社
- 村井章介 1990 「古琉球と列島地域社会」『新琉球史—古琉球編—』琉球新報社、所収
- 1997 「中世国家の境界と琉球・蝦夷」村井ほか編『境界の日本史』山川出版社、所収
- 室賀信夫 1956 「魏志倭人伝に描かれた日本の地理像—地図学史的考察—」『古地図抄—日本の地図の歩み—』東海  
大学出版会、1983年、所収
- 森克己 1951 「日宋交通と地理学的世界観—とくに栗棘庵の輿地図について—」『続々日宋貿易の研究』国書刊行会、  
1975年、所収
- 森鹿三 1941 「栗棘庵所蔵輿地図解説」『東洋学研究 歴史地理編』同朋舎、1970年、所収
- 山里純一 1999 a 「『隋書』流求伝研究の論点」(初出1993年)『古代日本と南島の交流』吉川弘文館、所収
- 1999 b 「漂到琉球国記について」(初出1998年)同上書、所収
- 李燦 2005 (山田正浩・佐々木史郎・渋谷鎮明訳)『韓国の古地図』(原著1991年刊)汎友社
- 梁嘉彬 1972 「宋諸蕃志流求国毘舍耶国考証—兼考宋前宋後琉球及台湾澎湖諸島—」『大陸雜誌』44-1
- 和田久徳・池谷望子・内田晶子・高瀬恭子訳注 2001 「『明実録』の琉球史料(一)」沖縄県文化振興会公文書管理部  
史料編集室